

史蹟史料部

2024年6月29日

#56

日本人墓地公園

バトゥパハに残る日本の面影

3月、ジョホール日本人会事務局長にご案内いただき、マレーシアのバトゥパハを訪れました。

ジョホールバルから車で 2 時間ほどドライブしたところにある小さな街ですが、かつて 20 世紀初頭にはスリメダンなどの鉱山開発やゴム農園事業のために多くの日本人が暮らしていました。

バトゥは石、パハはノミ、バトゥパハという街の名前には「石を掘る」という意味があり、鉱山開発で栄えたことを、うかがい知ることができます。

ニュースレター

その鉱山開発には、石原産業をはじめとした日本人 の功績を見ることができました。

今回は、シンガポールから日帰りで行けるバトゥパ ハの街と歴史をご紹介します。



バトゥパハは詩人 金子光晴が愛した街としても知られており、彼が滞在した旧日本人クラブの建物は現在も街の中心地に残っています。当時の日本人クラブは宿泊施設も備えており、3 階に滞在したと言われています。現在は、1 階のみが商店等として使用されているようです。



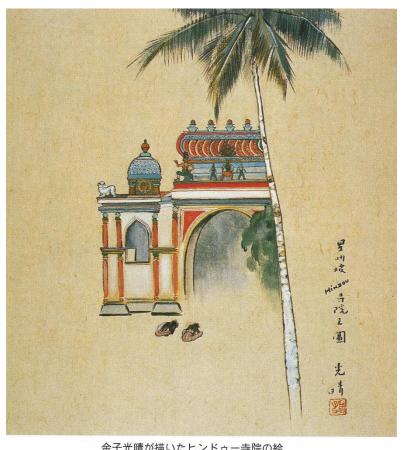
金子は日本人クラブの隣にある建物のお店で朝食がてら、よくバトゥパハ川を眺めていたという記録があり、ノスタルジックな雰囲気漂う建物に歴史を感じます。

史蹟史料部が訪れた金曜日は閉まっていましたが、向かいのバトゥパハ川には税関や検疫所が備えられており 現在は木材の集積地となっていますが、当時はゴムや鉱石を運ぶ貨物船の集積地でした。





1918 (大正7) 年から欧州を遊学し、1928 (昭和3) 年から1932 (昭和7) 年の5年間はアジアと欧州を旅していた金子は、各地で画展を開いて旅費を調達していました。1928年にシンガポールでも風景小品画展を開いています。マレー半島には1932年に4か月半滞在していました。「詩人 金子光晴自伝」には以下のような記録があります。

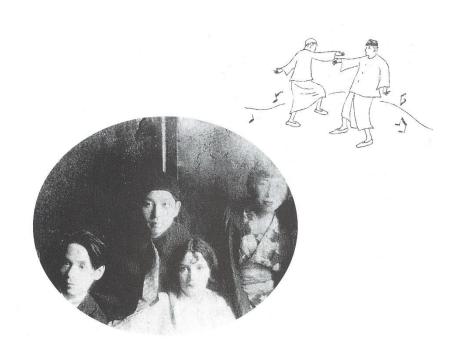


金子光晴が描いたヒンドゥー寺院の絵 Hindu temple painted by Mitsuharu Kaneko

『日本人クラブで、シンガポール風景小品画の展覧 会を開く。「このシンガポールでもたくさん欧州へ ゆきかえりの絵かきさんが展覧会を開いたが、金子 さん、あんたぐらい下手な絵を画く人もいない。わ しは、大いにそれが気に入った」そんなことを言い ながら肩入れしてくれるへそ曲がりもいて、シンガ ポールで小づかいができると、一先ず、ジャバへ行 ってみることにした。一中略一 僕は、白服に中折 帽子でスーツケース一つ提げて、ジョホール水道を わたり、邦人ゴムと石原鉄鉱の集散地、河口のバト パハまで、車を走らせた。熱雲の下、白枯れた椰子 林や、はてしないゴムの栽培林をつきぬけてバトパ ハに着くと、川蒸気でセンブロン川を遡ったセンブ ロン三五公司第二園に滞在し、さらにスリメダンの 石原鉱山を訪れ、大小数カ所の川すじのゴム園事務 所を泊り歩いた。僕はそこで泊って、もとめに応じ て、肖像や、風景を描いて稼ぎながらあるく「旅絵 師」というものになっていた。ジャングルと隣接す る辺地の宿舎で、虎のうそぶくのをきいた。夜道 を、コブラとぶつかったこともあった。さらに、東 海岸の三五公司第一園は、瘴癘(しょうれい)の地 で、白昼も蚊いぶしの煙幕のなかでなければすごせ なかった。野象の群れが裏山の樹林をおし倒して通 ったあとも見にいった。』(「詩人 金子光晴自 伝/より)

『ゴム園の人たちは、ウィスキーをのんで、麻雀 かテニスをやるのが唯一のたのしみだった。僕 は、夜になるとその人達に、パリや、日本の話しをした。五年以上も日本を留守にしている僕に比べて、彼らはもっとながく日本をはなれているので、五年前のニュースが、最新のニュースとしておどろきで聴かれた。』

(「詩人 金子光晴自伝/より)



1928 (昭和3) 年、左が金子光晴



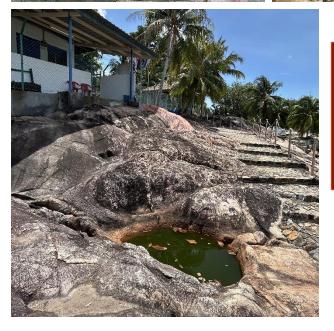


中心地の広場にある大きなモニュメントは手とノミの形をしており、「石を掘る」という意味の「バトゥパハ」を表しています。

バトゥパハという街の名前の由来となった、ペリギ・バトゥパハ(バトゥパハの井戸)にも行ってみました。中心地から車で 20 分程のカンポンミニャ・ベクの海岸にあります。







【バトゥパハの井戸】

この井戸はバトゥパハ川河口近くのミニャ・ベクの岸辺沿いにあり、1446 年から 1459 年に統治したマラッカ第 3 代目サルタンである、サルタン・マンスール・シャー時代にマラッカ攻撃に失敗したタイ人軍隊に掘られた。このタイ軍人達は岩に水が湧き出るまで穴を掘った。

岸に建てられたモニュメントの裏側には、上記のように日本語で説明が書かれており、その前に、500年以上前に掘られた小さな井戸が、ひっそりとありました。

また途中でバトゥパハの大学 Universiti Tun Hussein Onn Malaysia (UTHM)で日本語を教えていらっしゃる "バトゥパハ特派員"の檜山さんにもお越しいただき、日本とシンガポール、そしてバトゥパハに関わる場所として、尾張徳川家第 19 代当主であった徳川義親公が滞在した宿「レストハウス・バトゥパハ」にもご案内いただきました。



こちらは現在も宿として営業しており、宿泊することができるそうです。食堂とキッチンがある棟は一番古い建物で、古いオーブンがまだ残されていました。現在は使用することができないため、グレーのペンキで塗られ、テーブルとして使われています。







1921年5月から7月にかけ、吉井信照らとともに賀茂丸に乗船してマレー半島・ジャワ島を旅行した義親公は、同年5月21日にシンガポールに到着。宿泊していた日本ホテルに、ジョホールのサルタンから狩猟の誘いの電話があり、ムアーで虎と象を倒した記録が、著書「馬来の野に狩して」に書き残されています。

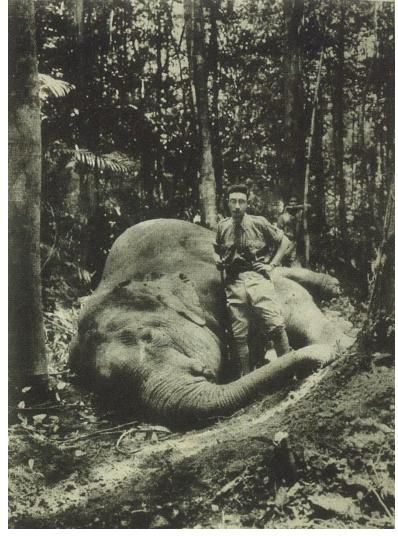
義親公は北海道で熊狩りをしており、そのことを岡本太郎氏 (芸術家)の父である岡本一平氏が漫画や記事を新聞に載せた ことで「熊狩りの殿様」と呼ばれていました。

蕁麻疹の療養で医師に転地を勧められてシンガポールに来る際に、「今度はマレーの虎狩りをするのだろう」と早合点した朝日新聞の記者に「虎狩りの殿様」と見出しに書かれたこと、そしてサルタンと共に、実際に虎を狩った話が南十字星創刊 10 周年記念復刻版に掲載されています。

「シンガポール日本人社会百年史」には、虎や象を倒した写真が残っています。



虎狩りの写真。左が義親公、右は吉井信照。



義親公が象を倒した写真。

最後に、バトゥパハから近い、スリメダン鉱山跡地に寄りました。現在は溜池となっています。

現在は写真左下のように看板がなくなっていましたが、かつては写真右下のように、ここがスリメダン鉱山であったことを記した看板が立っていたそうです(写真:油井事務局長提供)。看板には、「SECTION NO.7-1959 SRI MEDAN IRON MINE SRI MEDAN, BATU PAHAT, JOHOR | と書かれています。





スリメダン鉱山は、石原広一郎 が 1919(大正 8)年 8 月に発見した鉱山で、石原が設立した南洋鉱業公司が 1920 年から採掘を開始し、1921 年 1 月から、日本の八幡製鉄所へ鉄鉱石を供給、1920 年代半ば以降、中国産の 鉄鉱石を代替する役割を果しました。南洋鉱業公司は 1943 年に社名を石原産業株式会社に変更しています。

<u>ニュースレター#36</u>でご紹介した西村吉夫をはじめ、日本人墓地公園には石原産業の方の墓が多く残っています。

また、鉱山跡地から少し離れた場所に残っている橋脚を見学しました。現在は陸になっていますが、かつてここはスリメダン鉱石を積み込む港だったそうです。





日本人墓地公園には、台湾人のお墓もいくつか残っていますが、それは石原産業が台湾から派遣した、日本語 を話せる医師や歯科医のものであるという情報を、台湾の墓地研究者の方から提供いただきました。それはまた 別の機会にご紹介します。

シンガポールのお隣マレーシアのジョホール州で、日本とシンガポールの歴史に残る功績の跡地を見学しました。ご案内いただいたジョホール日本人会油井事務局長と檜山さんにお礼申し上げます。

写真出典 1: http://ktymtskz.my.coocan.jp/denki/n6.htm(鉄の生命線・マレー半島 太平洋戦争前の南洋 6) 参考文献:

「戦前シンガポールの日本人社会 - 写真と記録 - 改訂版」シンガポール日本人会 1998 年 6 月 27 日発行 「南十字星 創刊 10 周年記念復刻版 - シンガポール日本人社会の歩み - 」シンガポール日本人会 1978 年 3 月 1 日発行「シンガポール日本人社会百年史 – 星月夜の耀 – 」シンガポール日本人会 2016 年 12 月 23 日発行